

菅内閣発足で大混乱に陥る関西政局

「自公維」連立がもたらす「阪神割譲」

神戸市議会議員・元国会議員政策秘書 岡田裕二

「安倍（晋三）総裁が全身全霊を傾けて進めてこられた取り組みをしっかりと継承し、さらに前に進めるために私の持てる力をすべて尽くす覚悟であります」

9月2日の出馬表明でそう語った菅義偉官房長官は、国民の大半の予想どおり、14日に自民党総裁に選ばれた。16日に開かれる臨時国会で総理に指名され、菅内閣が発足する見込みだ。

筆者が塩崎恭久衆院議員（元厚労相）の政策秘書として国会で働いていた頃、とくに自民党が野党



長期政権の可能性も

だった時期、菅氏には仕事でよくご指導をいただいた。

11年3月に起きた福島第一原発事故の調査委員会を国会に設置する際、衆院の議院運営委員会筆頭理事として担当したのが菅氏で、筆者はその事務局を務めた。携帯電話で話をするときも声が小さく、車に乗っているときなどは声が聞き取れずに難儀をした覚えがある。

菅・橋下連立内閣

その後、12年12月に第2次安倍内閣が誕生し、政権の要である官房長官に就任した。当選4回で総務相に抜擢されたのが第1次安倍内閣（06年9月～07年8月）。勝ち目がないと言われた12年9月の総裁選に出馬するよう安倍氏に強く勧めたのも菅氏だ。「安倍さんには自分にはない大局観、国際的な視座がある」と親分を評していた「大

官房長官」は、ついに政治家の頂点を極めようとしている。

しかし、官房長官としての菅氏は、一部の自民党議員にとっては厄介な存在だった。その理由のひとつが公明党との過度な蜜月だった。本誌でも筆者は何度か、菅氏と創価学会の佐藤浩副会長との「連立」が、自民党厚労族の権威を骨抜きにし、診療報酬をはじめ、あらゆる医療政策の骨格を決めてきたことを伝えている（16年8月1日号など）

コロナ対策の定額給付金10万円を無理矢理決めたのも、この佐藤氏だ。公明党の山口那津男代表が、血の気が引いた青ざめた顔で、「連立離脱」を持ち出してまで安倍首相に一律10万円給付を迫ったのは、佐藤氏が「条件付きの30万円給付を学会は絶対認めない」と激怒したからだ。しかし、その実は、岸田文雄政調会長が財務省の幹部と

筋をつけてきた」実績を高く評価した。自民党内で、これほど強力な公明、維新両党とのパイプを持つ政治家は菅氏を除いていない。

菅政権は、事実上の「自公維」連立政権となるだろう。

しかし、選挙という熾烈な勝ち抜き戦が必然の政界で、「誰とでも仲よし」が通用するはずもない。公明・維新との蜜月の下、犠牲として差し出される勢力がある。それが関西、とくに大阪の自民党だ。

菅内閣が発足する前から、すでに大阪自民は瀕死の状態だ。11月1日に実施が予定される大阪都構想の住民投票を前に、自民党大阪府議団と自民党大阪市議団は賛否を巡って分裂。市議団は全員反対。府議団のなかでも賛否が分かれたが、府連としては8月22日の幹部会・役員会合同会議で都構想に反対する方針を決定した。

だが、府連の決定に公然と反旗を翻し、都構想と維新に寝返る府議が出た。維新との蜜月の下、都構想を事実上容認してきた菅氏が党総裁になれば、府連はますます迷走するだろう。

挙句、激高した市議・元市議の一部は、次期衆院選に公明党の選挙区から出馬することを表明。維新に寝返り、都構想賛成を打ち出した公明党に対し挑戦状を突きつけた。しかし、これは菅氏にとつては絶対を受け入れられない暴挙であり、やがて報復・制裁を受けらるだろう。すでに大阪府議会、大阪市議会の両議会において議席数で維新に大きく水をあけられ、少数会派に成り下がっている大阪自民は、菅内閣発足とともに完全終焉に至る。

16年、19年の2度にわたる参院選で、菅氏は自民候補の応援を断り、公明候補の応援に邁進したことも、本誌で過去に紹介したとおりだ。19年の参院選では、菅氏はツイッターでも公明候補への投票依頼を行ったため、筆者はツイッター上で「反党行為」と批判し、そのやり取りは朝日新聞などでも報道された。16年の参院選では筆者は兵庫県の自民党候補の選挙事務所長だったが、菅氏が公明候補の応援のため神戸に来ることは一切知らされず、当日報道関係者から

耳にしたほどだ。

見捨てられる大阪・兵庫

菅内閣の下、11月の都構想が実現すれば、名実ともに大阪は維新の手に陥落し、大阪自民も解散同然の状態になる。そして、21年7月には兵庫県知事選がある。現職の井戸敏三知事は任期限りの引退を明言しているが、自民党は選挙まで10カ月を切ったいまなお、候補者を擁立できていない。前例のない事態だ。

一方、日本維新の会の馬場伸幸幹事長は8月26日の記者会見で、同知事選について「次に首長をお預かりできる有力な県」と、半ば勝利宣言。都構想成立の雪崩現象で、兵庫県知事選も自民が敗北し、維新が勝利する可能性は高い。そうなる、その直後に行われる神戸市長選挙も雲行きが怪しい。自民党の大阪府連が見事に官邸から切り捨てられたように、兵庫県連も同じ道を辿ることになる。

大阪府と兵庫県は、菅内閣誕生に伴う生贄、「自公維」連立の結納

結託し、勝手に30万円案を決めたことに官邸官僚が反発し、その総大将である菅氏が佐藤氏に頼んで潰したとする見方が有力だ。

8年弱に及んだ安倍政権のなかで、常に公明党との強力なパイプを誇示してきた菅氏。同氏に対し、安倍首相が公衆の面前で屈したのがこの10万円騒動だった。この一件で岸田氏の後継候補としての面目は完全につぶれ、政権の主導を菅氏が掌握することとなった。

菅首相の誕生を熱烈に歓迎しているのは創価学会だけではない。8月31日のテレビ番組で、日本維新の会の創始者である橋下徹氏は、菅氏のことを「ものすごい実務能力に長けている人」「霞ヶ関を動かす特殊能力の持ち主」と絶賛した。その後も各メディアを通じて菅首相の誕生にエールを送っている。一方の菅氏も、9月5日のテレビ番組で、橋下徹氏を総務相として起用するののかとの問いに対し、肯定も否定もせず、橋下氏が大阪府知事となった際に自民党として支援した経緯があることを紹介し、大阪府・市政の「改革のひとつの道

金として「割譲」される可能性が高い。自民党議員が一人残らず大阪・兵庫から駆逐される一方、与党維新に第2党として待るのは公明だ。大阪で起こった自民と公明の離縁劇が、兵庫で再演されるのも時間の問題だ。

自民黨員、とくに保守層から「野党に行け」と言われている石破茂氏と、公明党から背中を斬りつけられた岸田氏が、21年の総裁選本選で躍進できるとは到底思えない。最初はリリーフと評されていた菅政権も長期化するだろう。そもそも菅総裁の立役者の1人である二階俊博幹事長も、谷垣禎一・前幹事長の自転車事故によるピンチヒッターだったはずが、すでに4年以上居続けている。論功行賞として、菅氏の威光が続く限り重職にとどまり続けるだろう。

しかし、自分の足を食うタコのような組織が永続するはずもない。関西自民党を粉砕した報いは必ず帰ってくる。8年前に政権復帰した自民党が、再び野党に転落する日も、それほど遠い先ではないかもしれない。